

久保蘭愛氏「ことばの扉— 外国資料からみる江戸時代の 日本語方言—」の報告

亀岡 真衣・久保蘭 愛・藤本真理子

はじめに

2023年度、藤本研究室では、岡山大学の久保蘭愛氏を招き、「ことばの扉—外国資料からみる江戸時代の日本語方言—」を開催した。当日の講座内容の報告に入る前に、日本語を外国語として学習するという場で用いられる表記の例を、『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE』という日本語を第二言語として学習する人向けのテキストから一つ紹介する。

(1) Kore wa hon desu. これは本です。(『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE』
p. 12)

(1) は、ひらがな・カタカナ・漢字という日本語の表記を用いずに表される日本語の例である。また、他に見える特徴としては分かち書きされており、助詞「は」が実際の音に合わせて「wa」と示されている。

このような表記の日本語は、(1)の他に歴史的にも観察でき、本学の日本語学（古典語）の授業では『天草版平家物語』や『天草版伊曾保物語』（2）などを紹介している。

(2) ara vtomaxiya! あら 疎ましや! (『天草版伊曾保物語』501-18)

(2) では、ポルトガル式ローマ字が用いられている。日本語が日本の文字表記だけによるものではないことが見てとれる。

今回の講座では、さまざまな日本語を知る機会の一つとして、岡山大学の久保蘭愛氏を招き、(1)(2)とも類似したような形で残る、外国資料に見える日本語、中でも日本語の方言が見える資料を取り上げて紹介してもらうこととした。講演内容については、キリル文字の表記法などにも触れながら、当日の様子を伝えることを目的としている。これは、講座に参加していた尾道市立大学学生の亀岡真衣さんを中心に執筆を行った。

続いて、講座の概要を以下に示す。

講座概要

- 開催日 : 2024年2月9日(金)
- 開催時間 : 14:00 ~ 16:00
- 開催場所 : 尾道市立大学E棟204教室
- 参加者 : 8人
- 案内文より

〈案内に示した文言〉(久保蘭)

外国人の目から見た過去の日本語方言の記述・記録を、みなさんと一緒に解読していきます。興味のある方はどうぞ:参考図書 村山七郎(1965)『漂流民の言語』(吉川弘文館)

講座では、まず平安時代の和歌集『古今和歌集』と江戸時代の注釈書『古今集遠鏡』の比較を通して、日本語の移り変わりを見た。日本語史の研究が、これまでは文化政治の中心地のことばである「中央語」中心であったことを再確認した上で、古典語としての方言も存することを、来日した宣教師によって作られたキリシタン資料のひとつ『ロドリゲス日本大文典』をはじめ、いくつもの例から伺った。この話を聞き、日本語と方言、それぞれの歴史から、過去の人々は方言をどのように認識していたのかを考えたくなった。

続けて講座では、外国との接点で成立した資料の一例として、日本語の姿が残る「ゴンザのロシア資料」と、その資料作成に携わったゴンザという鹿児島出身の人物について学んだ。そして、参加者全員でロシア資料に見られるゴンザの日本語の読解に挑戦し、気づいたことを共有した。見慣れない文字で書かれた資料は過去の方言も含んでいて読み解くことは難しかったが、講演会で配られた先生作の早見表を使ったり、参加者との話し合いを通したりして、楽しく順調に読み進めることができた。(亀岡)

次節では、読解したロシア資料とその編纂者のゴンザについて学んだことを示した後、読解の際に苦戦した点や印象に残った箇所を紹介する。

1. ロシア資料に挑む：講座で学んだ知識と読み解きの難しさ

ゴンザとロシア語資料について、講座で学んだことを踏まえて、紹介していく。

1. 1 ゴンザとロシア資料

講座で読解したロシア資料の編纂に携わった人物は、ゴンザという名の日本人である。ゴンザは、鹿児島県に生まれ、11歳の頃、父親の付き添いで大坂まで船で向かっていたところを暴風雨に遭い、ロシアに漂着した。ゴンザは現地でロシア語を学びながら、自身の母国語を忘れずにいようとロシア人に日本語を教え、同時に日本語資料の編纂に携わっていたとのことである。

ゴンザが編纂に関わっていたロシア資料には、言語を記録・保存するために必要な文法書・辞書・テキストの三点が揃っており、次の3つの特徴があるという説明が久保菌先生からあった。

- ロシア語を日本語に翻訳した資料である。
- 日本語はゴンザが生まれ育った18世紀前半の薩摩方言を反映する。
- 日本語は仮名文字ではなく、ロシア語のアルファベットであるキリル文字で表記されている。

1. 2 キリル文字の読み方

前節からもわかるとおり、ゴンザのロシア資料を読むにはキリル文字の解

読が必須であったのだが、今回、講演会の参加者はほとんどがキリル文字になじみがなかった。しかし、私を含め参加者全員が、久保菌先生のサポートを受けて、日本語表記や英語アルファベットとの違いにつまずきながらも、なんとか資料に書いてあった内容を理解することができた。まずは音の違いを身近な単語で確認し、ウォーミングアップとして自分の名前をキリル文字で表した。

(3) 亀岡 真衣 (かめおか まい) → Каменка Май

(資料) 久保菌先生による講座資料の一例「キリル文字早見表」

ロシア語アルファベットについて (現代)

・母音

※通常のロシア語文法書だと、硬母音・軟母音に分けて示すが、ここでは日本語母語話者に馴染みやすいあいうえお順に相当させて示す。

	ア	イ	ウ	エ	オ
	а[ə]	и[i]	у[u]	э[ɛ]	о[o]
	я	ы[i]	ю	е[ɛ]	
半母音相当	я[a]		ю[u]	е ^{yo}	ё ^{yo}

・日本語とちよっと違う発音は

- y [u] : 日本語よりも口をすぼめる。
- o [o] : 日本語よりも口をすぼめる。(東京外国語大学ロシア語モジュールより)
- ы [i] : ウとイの間 (日本語の「パス」の スに近い)

ke = i
e = i

18

ロシア語アルファベットについて (現代)

・子音

- 城田(2010)を日本語母語話者に馴染みやすいように一部改変。
- 東京外国語大学ロシア語モジュールも参照。

日本語の音に近いもの	日本語にはあまり身近でない音		
k[k], r[r]	カ行子音, ガ行子音相当	р[r]	巻き舌のr
c[s], ɶ[z]	サ行子音, ザゼ子音相当	л[l]	英語のLのような音
ʦ[tʃ], ɸ[dʃ]	タ行子音, ダデ子音相当	ф[f], в[v]	英語のfの音 = 唇歯音と, その有声音 (むしろワ行音のように聞こえる)
п[p], б[b]	パ行子音, バ行子音相当	х[x]	ハに聞こえるが, 後舌と軟口蓋に狭めを作る音。
м[m]	マ行子音相当	ш[ʃ], ж[ʒ]	シャ・ジャに近いが, 舌が奥に盛り上がり, 舌先を立てるように狭めを作る
н[n]	ナ行子音相当	щ	今回の日本語部分には出て来ない音。長めのш
ц	ツの子音相当		
ч	チの子音相当		

モスクワ Ba w

U Y

19

ように見える。

久保蘭先生によると、(ア) (イ) いずれの点も、ゴンザの出身地である鹿児島県の方言が関係しているとのことであった。そこで、『講座方言学 九州地方の方言』『鹿児島県の方言』(pp. 306-307)の項目を確認したところ、次の(あ)(い)のように記述されていた。

(あ) 語尾のキ・ギ・ク・グ・チ・ジ・ツ・ビ・ブ、動詞語尾のルは [ʔ] ~ [t] と実現されることが多い。(中略) 語中でも [kiʔne] (狐)、[iʔmo] (息も) のようにあらわれ、また、共通語と違って [koggo] (国語)、[iddo] (一度)、[habban] (八番) ' [kuzsure] (靴ずれの) ように [-gg-], [-dd-], [-bb-], [-zz-] の現象が認められる。

(い) 長音の短呼も活発である。[sodo](騒動)、[utota](歌うた) など。しかし、新来の語は長音そのままに発音されやすい。

(あ)は無声化、(い)は長音短呼に関連する記述である。ここで確認できるとおり、(ア) (イ)には方言が記録されている様子が見えた。

(ウ)については、日本語の歴史の中で江戸時代初期ごろに起こったとされるハ行子音の変化をとらえた例と言えそうである。このハ行子音のf音表記は、他のキリシタン資料においても例が確認できる。次の(5)である。

(5) Sonotoqi Efopoga yūua: fōjite fītoua fōcano fugatavomotte jefiuoba ronjenu monogia: (その時E s o p oが言うは：総じて人は 他の姿を持って是非をば論ぜぬ物ぢゃ：) (『天草版伊曾保物語』)

(5)では、「人」の「ヒ」、「他」の「ホ」、「是非」の「ヒ」にあたる文字の子音が、現代のヘボン式ローマ字に則った「h」表記ではなく、ゴンザのロシア資料と同様に「f」表記となっている。中央でのハ行子音の変化より少し後まで、ハ行のf音が保たれていたと見ることができそうである。

また、音の変化の例も確認できた。

【音の変化】

(6)	нараве	нифонно	котобѣ
	narave	nifonno	kotobe
	ナラ <u>ウエ</u>	ニフォンノ	<u>コトベ</u>

(6) の日本語訳は「習え、日本の言葉に。」である。ここでは次の (エ) (オ) の 2 点が気になった。

(エ) 「e」の前に w 音を表すキリル文字がある。

(オ) 「日本の言葉に」に相当するところが「kotobe」と読める。

(エ) は、「ナラエ」ではなく、「ナラウエ」とでも表したくなる音がキリル文字の「в」として入っている。ワ行音として発音されていたと見られる。(オ) の現象は、「ことば」という単語と助詞「に」の融合が起こっているのではないかという推測が受講者からあった。

次の (7) は、方言とはまた異なる観点から注目できる例である。

日本語訳：神はお前達に開くだろう。／神はあなたたちに門戸を開くだろう。

【文化の面に苦労が見えるおもしろさ】

(7)	фодокъ	конатгачи	акъяро
	fodoke	konattachi	akejaro
	<u>フォドケ</u>	コナツタチ	アケヤロ

日本語訳：神はお前達に開くだろう。／神はあなたたちに門戸を開くだろう。

「フォドケ」は「ホトケ」であると読み取ることができる。(3) と同じ「fo」が「ほ」に用いられているだけでなく、「と」が「do」表記である。無声子音の有声化が起こっている。

この箇所は、ロシア語で「神」という意味の言葉が、キリル文字に表記する際に「仏」と日本語訳されている点から、宗教の関与が見て取れる。受講者の一人である原優花さんからも、「「神」(ロシア正教)のことをキリル文字で「ホトケ」と記しているところが面白かった。ゴンザの語彙と機転に触

れられた気がする。」と感想があった。仏教徒の日本人とキリスト教徒のロシア人に挟まれたゴンザによる、双方の信仰する対象への配慮が背景に感じられる箇所である。

久保 蘭 愛先生からのコメント、受講者の感想

(久保 蘭先生)

今回、尾道市立大学でゴンザのロシア資料の成立過程や性質などをお話させていただきました。高校までの教育ではまず触れることのない資料で、おそらく大学の授業でも扱われることはほとんどないだろうと思います。また、現代方言自体はみなさんにとって身近であっても、方言の歴史という分野はあまり身近ではない分野かもしれません。

そんな資料をどのように読むか、そこから過去の方言がどんなものであったかを考えるという作業をみなさんに行っていただきましたが、はじめて触れるロシアのアルファベット・キリル文字であったにも関わらず、みなさん大変熱心に取り組んでくださいました。こう読めるかな、どうだろう、と一緒に考える時間がとても楽しかったです。一つ一つ文字を読むときのパズルを解くような感覚、生活のことばである方言の歴史を知るわくわく感を少しでも感じてもらえていたらとても嬉しいです。

(受講者の感想 1)

日本語が他の言語の文字で書かれている資料を読むことによって、当時どのように発音されていたかが読み取れておもしろかった。ゴンザの資料では、当時の鹿児島方言の読み方が、現在の読み方とロシア語の文字を通した読み方で異なる点がいくつか見つけて興味深かった。特に、「言葉」がゴンザによる日本語で「ことば」と読めるところが印象的だった。考えられる理由が「言葉」と助詞の「に」が融合したためと聞き、まさか名詞まで活用できてしまうとは思わなかったからである。

また、ゴンザ一行は元々大阪に行くはずだったにも関わらず、悪天候でロシアまで流され、そのまま帰国できなくなっただけでなく、現地でロシア語の勉強、日本語の教育、日本語資料の編纂を並行して進めなければならなく

なり、大変だっただろうと感じた。しかし、ゴンザの資料は、当時の言語について知る重要な手がかりとなり現代に残っているため、よくやってくれたと思った。

(受講者の感想2)

日本人がロシアに漂流したことで生まれたキリル文字の日本語資料があることを初めて聞いたので、興味をもって参加しました。キリル文字を扱う練習として、自分の名前をキリル文字で書くということをみんなでやってみたときに、私の名前のおよみと対応する当時の文字がなかったので、日本語をキリル文字で表記する難しさを体験できました。私が普段使っている話し言葉を記述することはとても大変です。もしゴンザのような状況に追い込まれたら私もこんなにできるでしょうか、やはり厳しいかもしれない、とその苦労を想像しながら、鹿児島方言が生き生きと反映された資料を読んでいきました。講座を終えて、ロシア語は分からないながらも文字はだいたい読めるようになりました。忘れないように今後もしもときどきゴンザの資料を眺めてみようと思います。

まとめ

今回の講座を通して、受講者には日本語を知ることができる資料の可能性を知ってほしいという期待があった。文献に残る資料といっても、どうしても、すでにテキスト化されて確認しやすい、手に取りやすいものばかりに接することが多い中で、読解に時間をかけ、資料としてどのような性質を持っているかを考えて取り組むことの意味にも改めて気づくことができていた。

受講学生の中には、キリル文字と日本語の文字との書き表し方の違いにとまどう人もいたが、これもまた世界の言語や表記体系を考える接点となったと言える。日本語も日本語の方言も、日本語の歴史もひとつの道がきれいに敷かれているわけではなく、点と点を結んでいく研究手法の一端を受講者も学ぶことができる機会となった。

引用文献

- 『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE I [REVISED 3RD EDITION]: Romanized Version)』国際日本語普及協会、講談社、2006
- 『天草版伊曾保物語』日本語史研究用テキストデータ集、国立国語研究所
https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/amis/ (2024年12月19日閲覧)

参考文献・資料

- 村山七郎 (1965) 『漂流民の言語』吉川弘文館
- 上村孝二、後藤和彦 (1998) 「鹿児島県の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』
飯豊毅一、日野資純、佐藤亮一編、国書刊行会
- 鹿児島県弁ゴンザ顕彰会 (鹿児島方言文化協会)
<https://hougen-bunka.com/gonza/> (2025年1月6日閲覧)

—かめおか・まい 日本文学科四年生—

—くぼぞの・あい

岡山大学学術研究院社会文化科学研究科准教授—

—ふじもと・まりこ 日本文学科准教授—